2013年8月30日 発行

市史だより
Fukuoka

17
史的再発見マガジン
［シシダヨリ・フクオカ］
Spring/Summer 2013
TAKE FREE

特集
多々良を耕す

連載コラム「歴・史・万・華・鏡」● 連載コラム「福岡市史への歩み」
部会だより（考古・古代・中世・近世・近現代・民俗）

Special Feature

福岡市東区

【多々良】

福岡市東区には、福岡平野の一部が広がっています。これは、名島付近で合流し博多湾に注ぐ、多々良川水系（多々良川・宇美川・須恵川など）が作ったものです。海・山・川・平地のすべてを間近に持つこのエリアに暮らす人びとは、その特色をどのように活かしてきたのでしょうか。今回は、多々良川流域の歴史を「耕して」いきます。

● 立地から変化をみる

多々良川中流域は、小高い場所に縄文時代以前の痕跡が遺り、旧石器時代の遺物もたびたび見つかる場所です。弥生時代が始まる頃には、大陸から移住してきた人びとが、農業に適した土地としてこの地を選びます（江辻遺跡）。その後も人びとは、丘陵の麓やゆるやかに延びた微高地に暮らしました。

弥生時代後期にさしかかる頃、農業中心の暮らしに工業の要素が加わります。当時の工業の証である金属器の鋳型が見つかっているのです。同じ時期、多々良川から少し離れた平野にある微高地では拠点集落が営まれ、そこでは金属製品が作られていました（比恵・那珂遺跡など）。鋳型が発見された多々良川右岸の丘陵の周辺にも、拠点集落があったのかもしれません。また左岸では、弥生時代終わり頃の有力者の墓に大型の石棺を用い、鏡を副葬するなど、ここでも多々良川流域が重要な地域であったことが表れています。

古墳時代前期には、有力者の墓（古墳）は、前時代同様、微高地に造られるもの（天神森古墳など）のほかに、見晴らしの良い場所（丘陵頂部）にも営まれます（名島古墳）。内陸側への意識に加え、海側への意識が高まった時代の変化を感じとることができます。

生活の場や墓の場所を選ぶときの条件は、それぞれに適した立地です。そして長きにわたって人びとがこの地域を選んできた根底には、多々良川が作った肥沃な土地と、そこで行われてきた農業の存在がありました。

● 多々良に広がる荘園

多々良川沿いには古代末から中世にかけて、有力寺社が荘園を展開しました。十世紀に成立する『和名類聚抄』の筑前国糟屋郡の項には、香椎・志阿（志珂カ）・厨戸・大村・池田・阿曇・柞原・勢門・敷梨の九つの郷名が載っていますが、多々良・八田・蒲田といった現在なじみの名はなく、これらの地名は荘園が展開した時代から、次第に文献資料に現れてきます（ただし蒲田は、粕屋町の江辻遺跡で出土した八世紀頃の須恵器に「加麻又郡」と書かれており、もっと古く遡るかもしれません）。糟屋西郷（現粕屋町仲原・戸原を含む糟屋郡西部に所在）には観世音寺や筥崎宮が荘園を置いた時期があり、筥崎宮はほかにも蒲田別符と呼ばれた荘園を長い間営みました。蒲田には、応永十七（一四一〇）年頃に宗像社の大宮司の所領もあったことが知られています。また、福岡市博物館所蔵の『三苫重義資料』によれば、香椎宮が八田郷と関わりを持っていたことがうかがえます。

多々良には、安楽寺（現在の太宰府天満宮）が荘園を置いていました。観応三（一三五二）年に写したと記される安楽寺の荘園目録（復元・翻刻は『太宰府市史』中世資料編 史料一六七に詳しい）には、多々良荘の名前も書き上げられています。享徳三（一四五四）年八月、この多々良荘に御祭のために田楽・酒肴の費用の一部を出すことが命じられました。安楽寺の八月の御祭といえば、康和三（一一〇一）年に始まり、現在では九月に行われている神幸式が思い浮かびます。なお『三苫重義資料』によれば、元亀二（一五七一）年になると、安楽寺のほかに香椎宮の支配も及んでいたようです。また年未詳ながら、糟屋西郷の一部として「多々良村」の名を記した古文書も残っています（『石清水文書』）。

多々良をはじめとする多々良川の流域は、多くの有力寺社を支えた場所でした。

アクセス

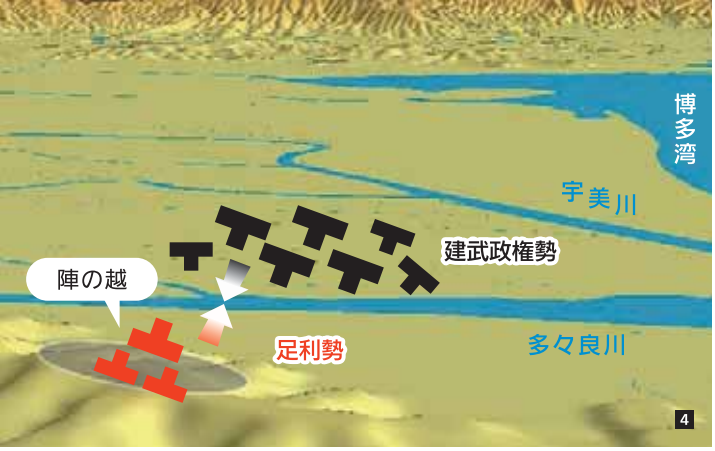
❶ 陣越緑地（福岡市東区若宮3-28）
【JR鹿児島本線／西鉄貝塚線】千早駅より徒歩約20分

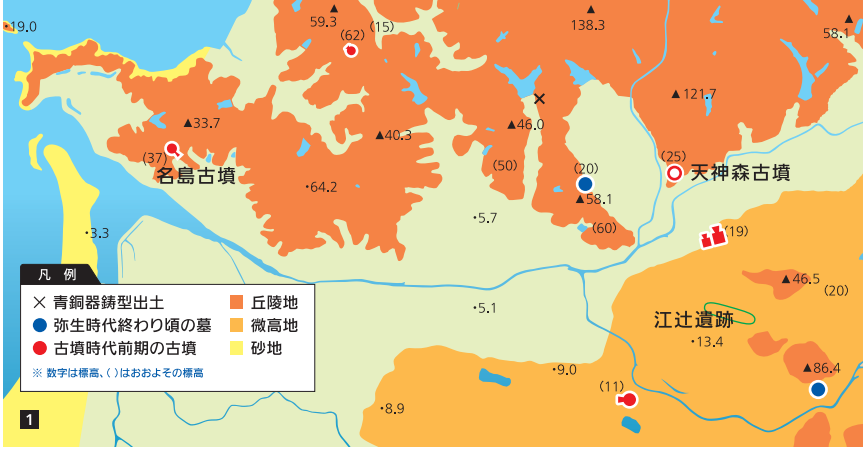
❷ 王丸彦四郎翁碑（福岡市東区松島2-2）
【西鉄バス】「大和町」停留所下車、徒歩約10分
（松島大橋たもと）

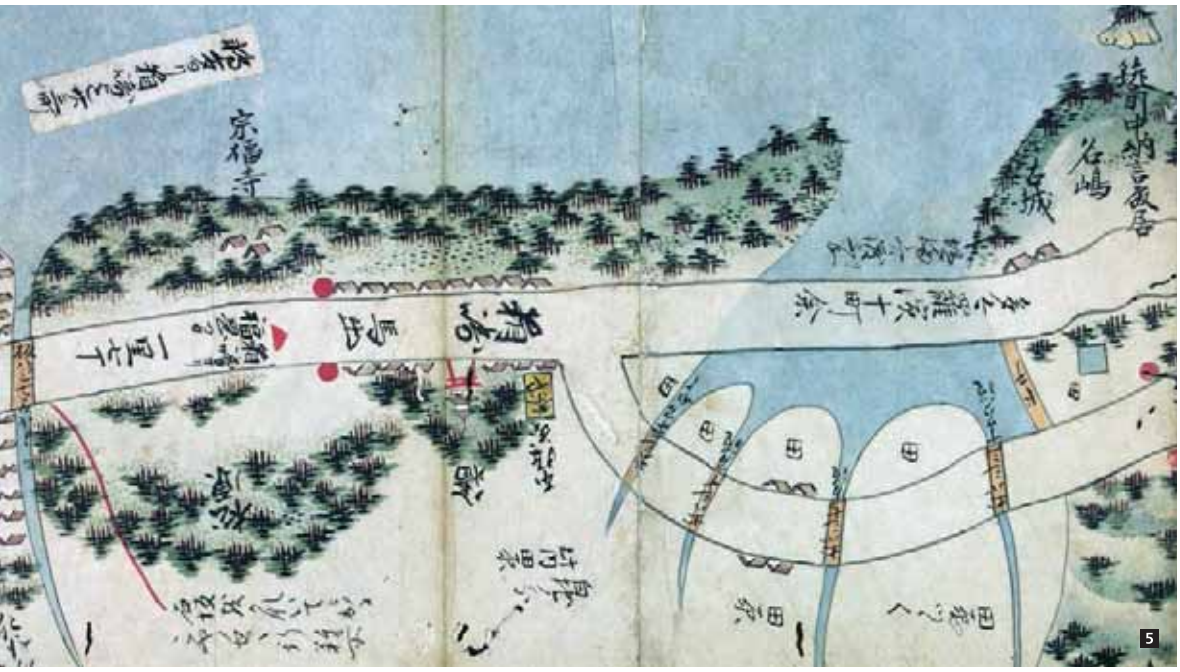
❸ 藤野小四郎翁記念碑（福岡市東区松崎1-13）
【西鉄バス】「松崎」停留所下車、徒歩約10分

❹ 土井駅（福岡市東区土井3-23-1）
【JR鹿児島本線→JR香椎線】JR博多駅より約25分
（JR香椎駅乗り換え）

❺ 旧顕孝寺跡の碑（福岡市東区多々良1-28）
【西鉄バス】「西鉄多々良」停留所下車、徒歩約15分







1 多々良川流域の地形と主な遺跡〈明治33年測図を基に作成〉。天神森古墳は墳形不明であるが、前方後円墳であったとする見方が有力
2 八田から見つかったとされる銅剣・銅戈の鋳型　3 天神森古墳から見つかった三角縁三神三獣鏡　4 陣の越から多々良川対岸を望む〈GISによるイメージ図〉。陣の越は「多々良浜の戦い」の際に足利尊氏が本陣を据えたと伝えられる場所。一説では尊氏は対岸に位置していた敵の大軍勢をここから確認し、一時は死を覚悟したという
5 「大里（門司）より長崎までの道程図」〈部分〉（寛文7〈1667〉年）

●「多々良浜の戦い」と流域支配

多々良川流域は、幾度か戦乱に見舞われました。そのなかでも規模の大きかったものが建武三・延元元（一三三六）年と永禄十二（一五六九）年の、二度の「多々良浜の戦い」です。

前者は、京都から九州に落ち延びてきた足利尊氏方と、菊池武敏を中心とする建武政権方との戦いです。一説では菊池勢は兵力で足利勢を大きく上回っていたと伝えられますが、この戦いに勝利を収めたのは足利勢でした。その後尊氏は再び上洛して室町幕府を開くに至ります。捲土重来を期す尊氏にとって、この戦いこそ天下分け目の戦いだったといえるかもしれません。

後者は、大友氏と毛利氏による合戦で、北部九州の覇権をめぐって争ってきた両者が多々良川を挟んで相まみえたものです。この戦いは永禄十二年の四月から十一月までの長期間に及び、大友氏と毛利氏の最後の大規模な衝突となりました。戦闘が長期化するなか大友氏は一計を案じ、大内氏の生き残りである大内輝弘を毛利領国に送り込んで反乱を起こさせます。毛利氏はこの反乱の鎮圧のために九州から撤退せざるを得なくなり、その結果九州への足がかりを失うことになりました。これ以降、毛利氏が北部九州に進出してくることはなく、大友氏が支配体制を築くことになりました。

特集

荘園、干拓、競犁会。多々良川流域で生きてきた人びとが遺した知恵と技術の記憶をたどる。

多々良を耕す

これをうけて、多々良川流域の荘園にも変化があったようです。例えば、筥崎宮の蒲田別符の記録が途絶えてしまうなか、元亀年間（一五七〇～一五七三年）に、田原鶴満に対して蒲田一〇町の支配を保証したのは、大友宗麟でした。

●干潟の開発

『福岡県地理全誌』の「多田羅村」の項に「村の西の遠干潟を云」とあるように、村の西を流れる多々良川には干潟があったことがわかります。天正十五（一五八七）年に細川幽斎が記した『九州道の記』にも、「舟をはるかなるひかたのさきへ廻して、多々羅はまにかちにて行く」と見えます。

十八世紀初頭、多々良潟の開発案が糟屋郡多々良村に住む王丸彦四郎から福岡藩に提出されました（『王丸彦四郎翁碑』）。この案は藩に採用されたのち、幕府へ提出。許可が下りると、宝永元（一七〇四）年に工事が開始されました（『黒田家譜』）。

工事に際しては、藩から柳瀬与兵衛を総指揮として、さらに三名が奉行として任命され、現場では斎藤忠兵衛以下五名が工事の指示を出したそうです（『黒田家譜』）。人夫には糟屋・那珂・席田三郡から約七万人が動員され、工期はたったの五日間だったといいます（『王丸彦四郎翁碑』）。

多々良潟に完成した潮留めの土手は、長さ九九四歩（約一八〇七メートル）、幅八歩（約一五メートル）に及び（『王丸彦四郎翁碑』）、土手が完成したことで、干潟は三五町九反四畝余（約三五・六ヘクタール）の田地に変わりました。この田地は、工事に際して出資をした博多商人の屋号から「ムツタ（六田）」と呼ばれました（『筑前国続風土記附録』）。

●多々良を耕した犁

北部九州では明治初期から牛馬を用いて田畑を耕す牛馬耕が普及しており、その技術向上には高い関心が寄せられていました。そういったなかはじまったのが「競犁会」です。競犁会とは、牛馬に犁をひかせて畦を作り、いくつかの項目により採点、順位を競う大会で、犁の性能向上と技術の熟練を目的としていました。競犁会は明治後期になると全国で開催されるようになるのですが、この動きに先駆ける形で、多々良では小規模ながら明治十三（一八八〇）年に最初の競犁会が開催されました（『日本農業発達史』1）。

この開催を提唱したのは、松崎の農家の藤野小四郎（一八四六～一九二〇）でした。藤野は、犁の改良と普及に取り組み、また徳

ひとくちコラム　土井駅100年

ＪＲ香椎線土井駅は、どこででも見かけるような小さな駅ですが、実は100年以上前からこの地に座している古株です。

土井駅は明治37（1904）年、博多湾鉄道（のち博多湾鉄道汽船）の西戸崎ー須恵間開業と同時にスタートしました。この路線の主な目的は糟屋郡で採掘される石炭の輸送で、その後も需要にあわせて宇美や志免へと延伸し、現在の香椎線の前身となりました。

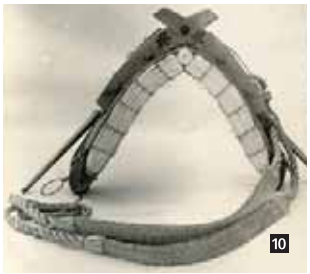
石炭輸送だけでなく旅客の利用も徐々に増え、特に土井駅は天照皇大神宮（通称伊野神社、糟屋郡久山町）の最寄り駅として多くの参拝客に利用されました。最寄りといっても５km以上離れていますが、春の大祭時には「多数の昇降客ありたり而して猪野行き沿道の諸所にはにわか造りの掛茶屋設けあり」（福岡日日新聞1909年5月4日）とのことですから、その行程も含めて当時は行楽だったのでしょう。

昭和半ばには、久山町の麻生山田炭鉱から土井駅に石炭を運ぶための空中索道（ロープウェイ）が造られました。索道は久山町から森江山と名子を抜け、土井駅まで直通したようで、その支柱跡が現在でも名子に残されています。

昭和も後半に入ると久山町や近隣の炭鉱も閉山になり、土井駅は石炭輸送の中継点としての役目を終えました。周辺地域は住宅地として整備され、現在の土井駅は住民の通勤・通学を支えています。

▲現在の土井駅

名子に残る空中索道の支柱跡▶



6 犁を使う様子［福岡県立農事試験場（福岡県立農業試験場）ヵ］　7 競犁会の様子［粕屋農業高等学校ヵ］　8 競犁会優勝者の記念写真。足元にあるのは犁と鞍。優勝旗には「九州博多磯野七平鋳造所寄贈」の文字が見える　9 長式農具製作所製の犁。本体には「福岡市外多々良」や「長式深耕犁」の刻印が見える　10 長式農具製作所製の鞍。これを馬に載せ、犁と連結させる　11 自宅敷地内（現在の多の津）に建てられた長末吉の銅像

島県に招かれ米作指導者として活躍するなど、農業振興に尽力した人物でした。帰郷後には除虫・除草器を発明し、特許も取得しています。こうした活動から、当時は農具発明者としても知られていたようです（『福岡県官民肖像録』）。昭和八（一九三三）年にはその功績を称え、生家の近くに記念碑が建てられました。そこには賛助員として当時の糟屋郡農会長や糟屋郡各町村長の名が刻まれており、藤野が地元に遺した功績の大きさを物語っています。

藤野と同じく、多々良で犁の開発や牛馬耕の技術向上に貢献したのが、長末吉（一八七九～一九三六）でした。長は、農家の労力軽減には犁の改良が必要と考え「長式深耕犁」を考案、長式農具製作所を設立します。当時犁の製作は、もともと武具などの鋳造で知られた博多の磯野・深見という大手二社が担っていましたが、長式農具製作所は全国でもそれらに次ぐほどの生産高を誇っていたといいます（『福岡県史』近代史料編 福岡農法）。

また長は、講習会での技術指導や、犁の技術を学ぶ講習生の受け入れなどを行ったほか、糟屋郡立粕屋農学校（のちの粕屋農業高等学校、現福岡県立魁誠（かいせい）高等学校）の馬耕教師として、後進の指導にも取り組みました。昭和二年、それらの活動が高く評価され、福岡県下の農業関係者により長の自宅に銅像が建てられました（のちに戦中の金属供出により撤去）。

その後、時代は牛馬を必要としない動力農機具へと移行しますが、農業機械が広く普及するには時間を要しました。その間農業を支えたのはやはり牛馬耕で、犁は農家にとって牛や馬とともに大切なものだったのです。機械の普及後、牛馬耕はなくなり競犁会が行われていた風景も一変しましたが、近代農業の発展の一助となった犁には、先人たちが培った技術と知恵がしっかりと刻まれ、その記憶を今に伝えています。

“多々良の文化交流サロン” 顕孝寺

かつて多々良には神感山顕孝寺（けんこうじ）という禅寺がありました。この寺院は鎌倉時代末期に大友貞宗によって創建されたものです。顕孝寺は大友氏や大内氏といった有力大名と密接に結び付いて、大陸との交易の窓口の役割を果たし、中国商人や渡来僧が来訪するなど文化交流の拠点となっていました（『東海一漚集』『明極和尚語録』など）。享禄（きょうろく）年間（1528～1532年）には、朝鮮との交易に大きな役割を果たしていた対馬宗氏の元を、顕孝寺住持が大友氏の使節として訪れたりもしています（『大永享禄之比御状并書状之跡付』）。

交易の拠点として発展し、中世の福岡を代表する寺院のひとつであった顕孝寺ですが、戦国時代に兵火によって失われてしまいました。現在同地にある顕孝寺は、その寺名を惜しんで慶長（けいちょう）年間（1596～1615年）に建てられた別の宗派の寺院です（『筑前国続風土記』）。

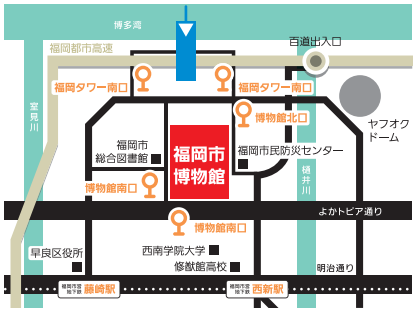
▲ 現在の顕孝寺から南東へ約700m、川を渡った場所にある多々良遺跡から出土した13世紀後半～14世紀の貿易陶磁

第９回福岡市史講演会
「遺跡からみた自然災害と福岡」を開催します

日時 平成25年10月12日（土）13:30～16:30（開場13:00）

会場 福岡市博物館１階 講堂

福岡市早良区百道浜3-1-1　TEL 092-845-5011（代表）
【西鉄バス】「博物館北口」「博物館南口」「福岡タワー南口」停留所下車、徒歩約５分
【市営地下鉄】地下鉄空港線「西新」駅（K04）下車、1番出口から徒歩約 15 分



▶ **入場無料・事前申し込みが必要です**（定員230名）

申し込み方法

往復はがき、または「福岡市史」ホームページよりお申し込みください。
往復はがきは１枚につき２名まで、ホームページからは１回につき１名の受付となります。

平成25年 9月30日（月） 必着

申込方法 1 往復はがき

①氏名・住所・電話番号（2名お申し込みの場合は、全員の氏名も必要）②返信はがきの宛先に、申込者（2名お申し込みの場合は代表者）の郵便番号・住所・氏名以上をご記入の上、お申し込みください。

申込方法 2 「福岡市史」のホームページ

下記にアクセスの上、ホームページ内のフォームからお申し込みください。（要メールアドレス）
▶ http://www.city.fukuoka.lg.jp/shishi/

申し込み・問い合わせ先
福岡市博物館
市史編さん室
〒814-0001
福岡市早良区百道浜3-1-1
TEL：092（845）5245

10月1日以降に入場整理券を発送します。
ホームページからお申し込みの場合は、メールにて返送いたしますので、ドメイン指定受信を設定されている方は「@city.fukuoka.lg.jp」からのメールが受信できるように設定してください。

応募者多数の場合は、抽選の上、結果をお知らせいたします。

ご応募いただいた際の個人情報については、厳重に保管・管理し、今回の講演会に関するご連絡または実施記録にのみ使用させていただきます。

講演会のお知らせ

講演

岡村 眞（おかむら・まこと）
高知大学特任教授
「警固断層ならびに南海トラフ巨大地震の歴史からこれからを考える」

寒川 旭（さんがわ・あきら）
産業技術総合研究所客員研究員
「地震考古学への招待」

磯　望（いそ・のぞみ）
西南学院大学教授／福岡市史編集委員会考古専門部会専門委員
「遺跡分布からみた福岡の環境変化と災害」

シンポジウム

『福岡の遺跡と環境変動・自然災害』
パネリスト　岡村 眞／寒川 旭／磯 望
司　会　宮本一夫（みやもと・かずお）
九州大学大学院教授／福岡市史編集委員会編集委員

関連展示

『自然と遺跡からみた福岡の歴史』
● 会場：福岡市博物館２階　企画展示室４
● 会期：平成 25 年 10 月 1 日（火）～12 月 15 日（日）

七代目市川團十郎と博多

江戸時代後半、博多聖福寺に、機知に富んだ禅的戯画を描くことで知られた僧、仙厓（一七五〇～一八三七）がいた。ある日、来博中の七代目市川團十郎（一七九一～一八五九）が、天下の名僧に会いたいといって、人を介して申し込んできた。そこでちょっとだけという約束で、翌日團十郎は同寺の虚白院に出掛けたが、長時間次の間に待たされ、いっこうに仙厓は現れる気配がない。膝もくずさずがまんして待機していると、突然、襖が開き、「あっ」と眼目大きく開いて見上げる團十郎に、仙厓は立ったまま「何という大きな目ん玉だい」といって、さっさと戻って行った。そのとき團十郎は一言、「これで江戸への見上げができた」と喜んだという。後年、團十郎の家に「お江戸では市川二かは知らねども　ぴんとはねたる海老の目の玉」と書かれた仙厓の掛け軸があったとも。

「江戸の見上げ（土産）」という洒落が入ったこの話は、真偽のほどはわからない「仙厓ばなし」のひとつである。江戸の人気役者七代目團十郎が九州に来たのは天保五（一八三四）年のこと。ただし二年前に長男が八代目團十郎を襲名しているので、このとき四十四歳の七代目は市川海老蔵と改名していた。天保五年といえば、四月に福岡藩が中島浜新地（現 博多区中洲中島町）に芝居小屋や茶屋など繁華街を建設し、藩直営で芝居や角力の興行を行い、藩の財政再建を画った年であった。七月には市川海老蔵（七代目市川團十郎）が、翌六年春には市川團十郎一座が来演し、大入りの歌舞伎興行は今の中洲繁栄のもとを築いたといわれる。

昭和四十八（一九七三）年には、中島公園に團十郎の博多来演百四十周年を記念して、十代目市川海老蔵（十二代目市川團十郎）が碑銘を揮毫した「七代目市川團十郎博多来演之碑」が建てられた。

七代目市川團十郎博多来演之碑
（博多区中洲中島町）

考古

環境の変化を知るために、地図や写真、また江戸時代以前の絵図資料を比べ見ることがあります。現在に近づくにつれ、道が大きくなったり、昔あった山がなくなったりと、驚くことが多いでしょう。もっと遡って、地図や絵図がない時代の環境を考えるには、考古学や地質学・地理学などの調査成果がヒントを与えてくれます。『特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史』では、発掘調査や地質調査などから得た情報を基に、福岡市の大地ができた一億年以上前から現代に至るまでの環境の変化について、通史的またトピック的に解説しています。

古代

平成二十九年刊行予定の『資料編 古代1』に向けて、掲載する文献資料の選定を始めました。文献資料は『資料編 古代1』『同2』の二冊にまたがって、原則、編年（古い記事から順に並べる方法）で掲載します。そのため、実際の資料選定にあたっては、二冊分を同時に選び、並べてみて、どこで1と2を分けるかという判断が必要です。市域を含む筑紫に関する記事は一万件以上に及んでおり、利用しやすい掲載基準を設けて記事を取捨していくのは気の遠くなる作業ですが、その過程で思わぬ市域の特徴が浮かんでくることもあり、自治体史編さんの醍醐味のひとつともいえます。

中世

『資料編 中世1』は、附録に「聖福寺古図（原寸大複製）」を収録しましたが、平成二十六年刊行予定の『資料編 中世2』の附録には「承天寺古図（原寸大複製）」の収録を予定しています。

承天寺はご存じの通り福岡を代表する寺院のひとつですが、「承天寺古図」は室町時代の承天寺の境内を描いたもので、当時の承天寺の様子を知ることができる大変貴重な資料です。今回所蔵者のご厚意により、『資料編 中世2』の附録とすることが可能となりました。現在、作成を進めていますので、どのようなものができあがるか、ご期待ください。

近世

現在編集中の『資料編 近世2』について、内容を少しご紹介したいと思います。

掲載史料のひとつに「御家人先祖由来記」があります。これは来年没後二〇〇年をむかえる福岡藩の学者である貝原益軒が編さんしたもので、播磨、中津、福岡において黒田孝高（官兵衛）・長政に仕えた一二〇を超える家臣の由緒をまとめた史料です。

来年のNHK大河ドラマは『軍師官兵衛』です。史料に出てくる家臣が劇中でどのように描かれるのかはわかりませんが、ドラマと史料をあわせて、黒田家を支えた人びとを見ていくのも面白いかもしれません。

近現代

『特別編 近代福岡の文化とメディア（仮）』（平成二十八年刊行予定）の編集を本格的にスタートさせました。先日開催された編集会議において、構成案が示されました。

この特別編では、明治から高度経済成長期までの福岡における文化活動を「印刷」「出版」というメディアを切り口として描きます。構成は、書影などを多く用いるビジュアル重視の巻とする方針です。

これまで福岡市文学館などで、近代福岡の文学史・出版史に関する調査・研究が行われてきましたが、今回の特別編ではこれらの成果を積極的に取り入れながら、編集を行っていきます。

民俗

『民俗編二 ひとと人々』をどのような目次立てにするか議論しています。

これまで民俗専門部会は、さまざまな個人・地域・団体への聞き取り調査を実施し、そこで得た人々の語りと歴史的背景から、現在の市民生活の多様な側面を描き出そうと試みてきました。この試みはもちろん今も継続中であり、それ自体難しい問題でもありますが、では描き出した集積をどう一冊の本として組み立てるのか、という次なる課題も差し迫っています。民俗専門部会がこれにどんな答えを出すのか、よろしければお付き合いください。平成二十七年刊行予定です。

SF Columun

福岡市史への歩み

volume 16

文＝田坂大藏（福岡市博物館研究指導員）
Text : Daizo TASAKA

これまで、大正期に発案された「福岡市史」編さん事業の足跡を辿ってきました。「福岡市史」は市制施行の周年記念事業の一環としてその都度刊行が企画されてきたのですが、刊行されたのは『福岡市市制施行五十年史』（1939 年）1 冊だけでした。

ところが、昭和 31（1956）年に始まった市制 70 周年記念事業としての「福岡市史」刊行事業は、戦後の社会の安定と文化・文化財への関心の高まりとがあいまって好ましい方向が示されました。対象とする時代は、明治 22（1889）年の市制施行以降、通史編に資料編を合わせると 19 巻という構成でした。編さん事業は昭和 33 年度から平成 9（1997）年度まで、約 40 年に及びました。2 年で 1 巻という計算になりますが、市職員を中心とした編さん体制のなかでは十分に努力してきたといえるでしょう。

昭和 40 年代になると都市生活基盤の整備も進みました。生活に余裕が出てくると、人びとの目が文化に向いてくるのは、一般的な傾向です。全国的に文化財が注目され始めたこの時期に、福岡市が全国でも珍しい遺跡として保護にあたっていたのが、史跡元寇防塁です。昭和42年6月には元寇防塁保存整備懇談会が設置されました。元寇防塁は、一部は大正期に発掘作業が行われていましたが、昭和43年からの発掘では、建築学、土木工学、地質学なども含んだ大規模調査が実施されました。また、文献史学上からの調査も行われ、昭和42年10月には防塁に関する直接資料だけをまとめた『史跡元寇防塁関係編年史料』が編まれました。その後も蒙古襲来に関する史料の収集作業は続けられ、昭和46年3月に、その成果として『注解元寇防塁編年史料―異国警固番役史料の研究―』が福岡市教育委員会から刊行されました。編者は蒙古襲来研究者としてつとに著名であった九州大学助教授（肩書きは当時）川添昭二氏でした。自治体が歴史事象の関連史料集を出版するのは稀有なことであり、行政がこのような基礎的な事業を行ったとして、学界で評判になったことを筆者は記憶しています。考古学だけでなく、調査対象に応じた諸学問を集めて成果を目指すようになったのは大変意義深いことでありました。文化財重視の姿勢は次第に固まっていき、昭和48年には「福岡市文化財保護条例」も制定されました。翌 49 年は元寇（文永の役）から700年目にあたるため、広く市民に郷土の歴史を知ってもらうために、福岡市教育委員会は記念事業として、有名な竹崎季長の『蒙古襲来絵詞』の複製出版（1975 年）を行っています。

文化財の保存活用を図るため、この元寇防塁調査のように、さまざまな学問的な調査研究の必要性が次第に行政のなかにも広がっていきつつありました。しかしながら、福岡市の歴史を知るためにもっとも基本的な「福岡市史」編さん事業そのものは、従来どおりの陣容と方法論で行われており、どの時点で一段落させるのかもよくわからない状況が続いていたのです。

【参考文献】
糟屋郡編『糟屋郡志』（臨川書店、1986年）● 香月洋一郎『馬耕教師の旅「耕す」ことの近代』（法政大学出版局、2011年）● 古賀茂男「九州の農業と犂の発達」（『九州大学農学部農場報告』第３号、九州大学農学部附属農場、1981年）● 清水浩「第四章 牛馬耕の普及と耕運技術の発達」（農業発達史調査会編『日本農業発達史』1、中央公論社、1978 年）● 清水浩「第三章 農機具発達の一段階」（農業発達史調査会編『日本農業発達史』4、中央公論社、1978年）● 長末吉『実験牛馬耕法』（吉原文作、1920年）● 西日本鉄道株式会社100年史編纂委員会編『西日本鉄道百年史』（西日本鉄道、2008 年）● 西日本文化協会編『福岡県史』近代史料編 農務誌・漁業誌（西日本文化協会、1982 年）● 西日本文化協会編『福岡県史』近代史料編 福岡農法（西日本文化協会、1987年）● 久山町誌編纂委員会編『久山町誌』上巻（久山町、1996年）● 深田豐一「福岡県官民肖像録」（博進社、1913 年）● 福岡県立農業試験場編『福岡県立農業試験場百年史』（福岡県立農業試験場、1979 年）● 福岡県立粕屋農業高等学校創立60周年記念誌編集委員会編『粕屋郡農業史』（福岡県立粕屋農業高等学校、1973年）

【協力】
田中克子 氏 ● 多々良公民館 ● 多々良小学校 ● 長 知宏 氏 ● 福岡県農業総合試験場福岡県農業資料館 ● 光安喜和子 氏

【資料所蔵】
粕屋町立歴史資料館 ►P5：⑦ ● 市史編さん室 ►表紙／P4：ひとくちコラム／P6：歴史万華鏡 ● 多々良小学校 ►P5：⑨ ● 福岡市博物館 ►P3：②, ③, ⑤ ● 福岡市埋蔵文化財センター ►P5：コラム ● 福岡県総合農業試験場福岡県農業資料館►P8：あとがき ● 光安喜和子 氏 ►P5：⑥, ⑧, ⑩, ⑪

●お詫び● 「市史だより Fukuoka 16」に掲載の「特集 七隈」の記事に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。
3 ページ中【写真４】【誤】「飯塚Ｆ遺跡」►【正】「飯倉Ｆ遺跡」

あとがき

不思議な模型

今回の取材中、面白い資料に出会いました。牛馬耕の模型です。写真は福岡県農業総合試験場の資料館にある展示品ですが、模型はこれだけではなく、取材で伺った東区蒲田のお宅にも馬耕の模型が飾ってあったのです。少なくとも取材班はこれまで牛馬耕をテーマにした模型など、見たこともありません。大きさはどちらもおよそ 1m ほどですが、よく見ると犁や鞍はもちろん、人の動きや牛馬の作りがとても細密で、制作者の力の入れ具合がわかります。これらが教材なのか思い出の作品なのか、また制作者は誰なのかなど、詳細は残念ながら不明ですが、当時は模型にするほど牛馬耕は重要だったのでしょう。技術の進歩や世代交代によって道具や風習は変わっても、このような形で当時の記憶が遺されたことは、制作当時考えられていた以上に意味のあることだと感じ、思わず見入ってしまったのでした。

編集／発行 福岡市博物館 市史編さん室
814-0001 福岡市早良区百道浜3-1-1／TEL：092（845）5245／FAX：092（845）5019

TAKE FREE